早稲田大学インクルーシブ教育学会ニュースレター

2023年度（令和５年度）No.3

令和5年度実践報告会

早稲田大学インクルーシブ教育学会では、学校現場でのインクルーシブ教育の実践を報告する場として「実践研究報告会」を毎年行っております。本年度も早稲田大学インクルーシブ教育学会の各部会（私学部会・授業実践部会・学生部会）から 、それぞれの現場で実践に取り組まれた方々に報告をいただきました。

講評/ファシリテーター：本田恵子教授　髙橋あつ子教授

私 学 部 会

「個別の指導計画」活用の実際

相談室黎明　高達光子先生

外部専門家として、私立学校の校内支援体制の構築・推進にどのように携わってこられたのか、個別の指導計画の活用を中心に、複数の事例をご紹介頂きました。

参加者から特に特に注目を集めたことは、高達先生が専門家の視点から一方的に支援策を学校に提案をしたのではなく、それまで既に行われていた学園の取り組みを「校内連携図」「個別の指導計画」「合理的配慮提供の STEP」という形で見える化することから始められていたことでした。そうすることで、先生たちが受け身になって専門家の意見にただ耳を傾けるのではなく、これまで学校が取り組んできた成果と今後の課題に自ら気づいて、意欲的に支援の拡充に取り組まれていたということでした。実際、「支援の見通しを持てた」「一貫した保護者対応ができるようになった」といった前向きな発言が現場の先生方からあがった他、更なる支援を行うための追加提案も会議で積極的に出るようになったようです。

授 業 実 践 部 会

UDL に着目した小学校社会科での自己評価力を高めるフィードバックの取り組み

公立小学校　藤丸知彦先生

藤丸先生は、小学校５年社会科、UDL の実践においてルーブリックを活用し、毎時間ごとに自己目標の設定とそれに基づく自己評価を重ねた学習者が自己評価力を高めていくプロセスと、その経過における指導者からの効果的なフィードバックについて、発表されました。

藤丸先生は社会の授業時に毎時間児童にルーブリックを配布して、その時間の到達目標と授業後の自己評価を書き込ませ提出してもらいました。それをみながら、児童が自身にあった目標設定ができているか、教員からみた評価と比較して適切な自己評価ができているかをみて、「実力と合わない目標設定と自己評価をしている児童（レベル１）」が、「自分の現状に合った目標設定をできる（レベル２）」ようになり、そこから更に「少し高い目標に取り組み（レベル３）」、「具体的にそこに達成する方法を記述できる（レベル４）」ようになるまで、どのようなステップを踏んでいくのか、その過程においては指導者からのどのようなフィードバックが効果的なのかを研究発表頂きました。

学 生 部 会

中学生に対する MI 理論を適用した個別指導

早稲田大学教育学研究科　　遠藤　秀聖　氏

読字書字の困難から学校での学習に困り感をもたれたことでご相談にこられた中学生に、どのような個別支援を行ってきたのかをご発表頂きました。

指導に当たっては、主に MI（マルティプルインテリジェンス）理論をもとにアセスメントを行い、「対人的知能」と「博物学的知能」が高かったことから、遠藤先生は zoom や対面でコミュニケーションをとりながら、本人がすでに体験的に知っていることと関連付けて学習内容を説明していく個別指導計画をたてられました。また語彙量は多いのですが、文章にまとめることが苦手だったため、個別授業の終わりにはその日の学習内容を短い言葉にまとめて説明できるように練習を重ねるなど、遠藤先生は中学生のお子様の特性を見立てながらその子にあった個別指導を実践されました。

今回の実践報告会は、意図的にではありませんでしたが、学園全体の組織的支援、教室全体の大人数に向けての支援、そして一対一の個別支援と、マクロからミクロへと視点をしぼって考察を深めていく形になりました。教員間でどのように連携をとって対応していくのか、たくさんの子どもたちにどのようにアプローチをしていくか、目の前の子どもの特性に合わせてどのようなサポートをしていくのか、参加者は様々な視点から学びが深めることができたのではないかと思います。また発表が終わるごとに少人数でのディスカッションを行い、その内容を全体で共有しながら本田恵子教授や髙橋あつ子教授からご講評を頂いたことで、それぞれの発表者もまた、更なる研究を進めていくための学びを得ることができたようです。

ご参加頂いた皆様からの感想≪一部抜粋≫

実践はなかなか上手くいかないことばかりですが、先生方も試行錯誤をしながら作っていることを知り、励まされました。

それぞれのお立場から伺った研究を、改めて整理し、自分の学びに落とし込み、今後につなげていくことができるようにしたいと思います。

実践をされた「報告会」、とても勉強になりました。指導計画、支援計画を作成したり、ルーブリックを作成したり実施したり、とても大変な作業です。モデルを示されたので、参考にできることは、とても有り難いです。

三者三様の実践が聞けて参考になった。個別の支援計画は検討はするものの作れないでいる。目標をどう定めて、その達成をどう測るのか、を考えて作成してみたいと思った。フィードバックに関しては、発表中に触れられた文献も参考にしたい。ＭＩに関しては、フィードバックとも重なる部分が大きいと感じた。どういうフィードバックをすることが子どものＭＩを生かすことになるのか、考えることがたくさんあると感じた。

次回研修会は、非行臨床研究所代表の石橋昭良先生をお招きして、１１月１２日（日）９：00 ～ 12:00 に行われる予定です。